

ゴディヴァの行進とコヴェントリ

メタデータ	言語: jpn 出版者: 明治大学商学研究所 公開日: 2019-05-31 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 熊澤, 喜章 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10291/20144

ゴディヴァの行進とコヴェントリ

The Godiva Procession in Coventry

熊澤喜章

Yoshiaki Kumazawa

I

1678年5月31日、コヴェントリで開催されたグレート・ショウ・フェア（Great Show Fair）の目玉の出し物のひとつとして、ゴディヴァの行進が披露された。時の市長（Mayor: 1677-8）は絹物商（Mercer）のミッチェル・アール（Michael Earle）、市長官（Sheriffs）はフランシス・クラーク（Francis Clark）とジョージ・アラット（George Allatt）、ゴディヴァ役はジェームス・スウィナートン（James Swinnerton）の息子がつとめた。この年のフェアは、かつてのフェアとは違って新機軸をなすもので、それを宣言するためにゴディヴァは市長を先導し、有力組合にはそれぞれ行進に参加する少年が割り当てられた。その割り当ては、反物商（Drapers）組合に2人、絹物商（Mercers）組合にも2人、鍛冶工（Blacksmiths）組合、織元（Clothiers）組合、毛皮商（Fellmongers）組合、製パン業（Bakers）組合、タイル工（Tylers）組合にはそれぞれ1人、市長、ならびに市長官には2人ずつ、裁断師と仕立屋（Sheremen and Tailors）組合、フェルト製造（Feltmakers）組合、靴製造（Shoemakers）組合にはそれぞれ1人、市当局には2人の少年と1人の通常の役人（Standard Bearer）という内容であった。それぞれの少年には従者が付き、各組合はそれぞれの紋章が描かれた吹き流し（Streamer）、すなわち紋章旗を持って行進をした⁽¹⁾。

コヴェントリが毎年の大祭（Great Fair）の開催を認められたチャーターは、すでに1217年あるいは1218年にヘンリ3世から獲得されていた。フェアを開催できる権利とは、中世都市にとってみれば、交易中心地としての都市の名声を内外に示す格好の機会であり、近隣や国内外の商工業者を呼び寄せるための重要な特権であった。ジャック・ル＝ゴフ（Jacques Le Goff）は中世における商業活動の範囲の拡大において、十字軍がはたした役割はそれほど大きいものではなく、地域レベルを超えた一部の大定期市にみられる国際規模の取引の拡大を重視し、12・13世紀における最も重要な例としてシャンパーニュの大市（Les grandes Foires de Champagne）をあげている⁽²⁾。この大市はシャンパーニュ地方のラニー（Lagny）、パール＝シュル＝オーブ

(1) B. Pool, *Coventry: Its History and Antiquities*, London, 1870, p.64; E. S. Hartland, *The Science of Fairy Tales*, London, 1891, p.75.

(Bar-sur-Aube), プロヴァン (Provins), トロワ (Troyes) と開催地を移動しながら1年を通して開催されており、領主のシャンパーニュ伯は、取引が合法的に、公正におこなわれているかを監視し、商業・金融活動を保護していたのであった。その際、各地域では著名な聖人の日等に市を開催し、来訪者の興味をひいたのであった。

コヴェントリにおいても、規模こそ違うものの、近隣および国内外の商工業者が一堂に集まるフェアは、1年を通じて最も重要なイベントであった。コヴェントリがイングランドの中世都市としてその隆盛を誇っていた14世紀後半から15世紀にかけて、コヴェントリは、ロンドン、ブリストル、ヨークに次ぐ王国内で4番目の都市となっていた⁽³⁾。それだけの都市でおこなわれるフェアである。集客の効果は絶大なものであったであろう。ところが、順調に成長してきたコヴェントリは、その後16世紀初頭から17世紀初頭にかけて重大な危機の局面を迎え、フェアに集まる人々も減少していた。17世紀後半とは、ようやくその危機からの脱却の光明がみえはじめてきた時代であった。そのため、1678年のフェアは、コヴェントリにとってみればかつてない盛大なお祭りを企画したのであり、その目玉の出し物がゴディヴァの行進だったのである。この企画はみごとにあつた。ゴディヴァの行進は、その後このお祭りの恒例の出し物となり、1835年の自治体法 (Municipal Corporations Act) が成立するまで、市当局が主催することとなった。コヴェントリ市当局にとってこのフェアの開催は、そこに人々を集め、多大な商取引を成立させるとともに、実際に町に結集した人々の消費行動が町に恩恵をもたらす重要な企画となったのである。

市当局が主催する出し物としては終盤に近い1826年5月26日金曜日におこなわれた行進の様子が、プール (B. Pool) によって紹介されている⁽⁴⁾。行進の前に名誉ある市長、参事会員 (Aldermen)、市議会議員 (Common Council with the Charter Officers of the City) とその随員はトリニティー教会 (Trinity Church) でおこなわれる礼拝式 (Divine Service) に参列し、その後12時ちょうどに大騎馬行進 (Grand Cavalcade) が始まった。行進は、聖ミカエル教会 (St. Michael's Church) の中庭を出発し、市内の主要道路を行進したのち、再び聖ミカエル教会の中庭に戻るルートでおこなわれた。

1826年5月26日のゴディヴァの行進の序列 (ORDER OF THE GRAND PROCESSION)

守護隊長 (Captain of the Guard)

および守護隊の一団

(2) ジャック・ル＝ゴフ、井上櫻子訳『中世と貨幣 歴史人類学的考察』藤原書店、2015年、44-5頁。

(3) *The Victoria History of the County of Warwick*, Vol.VIII, London, 1969, p.4; C.Gill, *Studies in Midland History*, Oxford, 1930, p.3.

(4) Pool, *Coventry: Its History and Antiquities*, pp.65-6.

鎧をつけた聖ジョージ (St. George, armed cap-a-pic)

4人のラッパ隊 (Bugle Horns)

市の紋章旗 (City Streamer) と随員

盛装の楽隊 (Grand Band of Music)

治安官 (High Constable)

ゴディヴァ (LADY GODIVA)

両側に市触れ役 (Crier) と儀官 (Beadle)

執行官 (Bailiffs)

市長の触れ役 市権標捧持者 (City Maces)

剣と権標 (Sword and Mace)

市長 (Mayor) とその随員

参事会員 (Aldermen) ・ 州長官 (Sheriffs) ・ 市議会議員 (Common Council)

式武官 (Chamberlains) ・ 長官 (Wardens) の一団とその随員

制服の楽隊

鼓笛隊 (Drams and Fifes)

諸組合 (COMPANIES)

絹物商 (Mercers) ・ 紋章旗 ・ 組合長 ・ 随員

反物商 (Drapers) ・ 紋章旗 ・ 組合長 ・ 随員

織元 (Clothiers) ・ 紋章旗 ・ 組合長 ・ 随員

鍛冶工 (Blacksmiths) ・ 紋章旗 ・ 組合長 ・ 随員

仕立屋 (Tailors) ・ 紋章旗 ・ 組合長 ・ 随員

楽隊と鼓笛隊

帽子工 (Cappers) ・ 紋章旗 ・ 組合長 ・ 随員

織布工 (Weavers) ・ 紋章旗 ・ 組合長 ・ 随員

食肉業者 (Butchers) ・ 紋章旗 ・ 組合長 ・ 随員

毛皮商 (Fellmongers) ・ 紋章旗 ・ 組合長 ・ 随員

楽隊と鼓笛隊

大工業 (Carpenters) ・ 紋章旗 ・ 組合長 ・ 随員

縄編工 (Cordwainers) ・ 紋章旗 ・ 組合長 ・ 随員

製パン業 (Baker) ・ 紋章旗 ・ 組合長 ・ 随員

絹織布工 (Silk Weavers)・紋章旗・組合長・随員
楽隊と鼓笛隊

諸慈善団体 (SOCIETIES)

諸慈善団体の会長・紋章旗・随員
楽隊と鼓笛隊

羊飼い・犬・仔羊

金羊毛を纏い抜身の剣を持ったイアソン⁽⁵⁾

(Jason, with a Golden Fleece and Drawn Sword)

5人の羊毛選別官 (Wool Sorters)

司教触れ役 (Bishop Blaze)

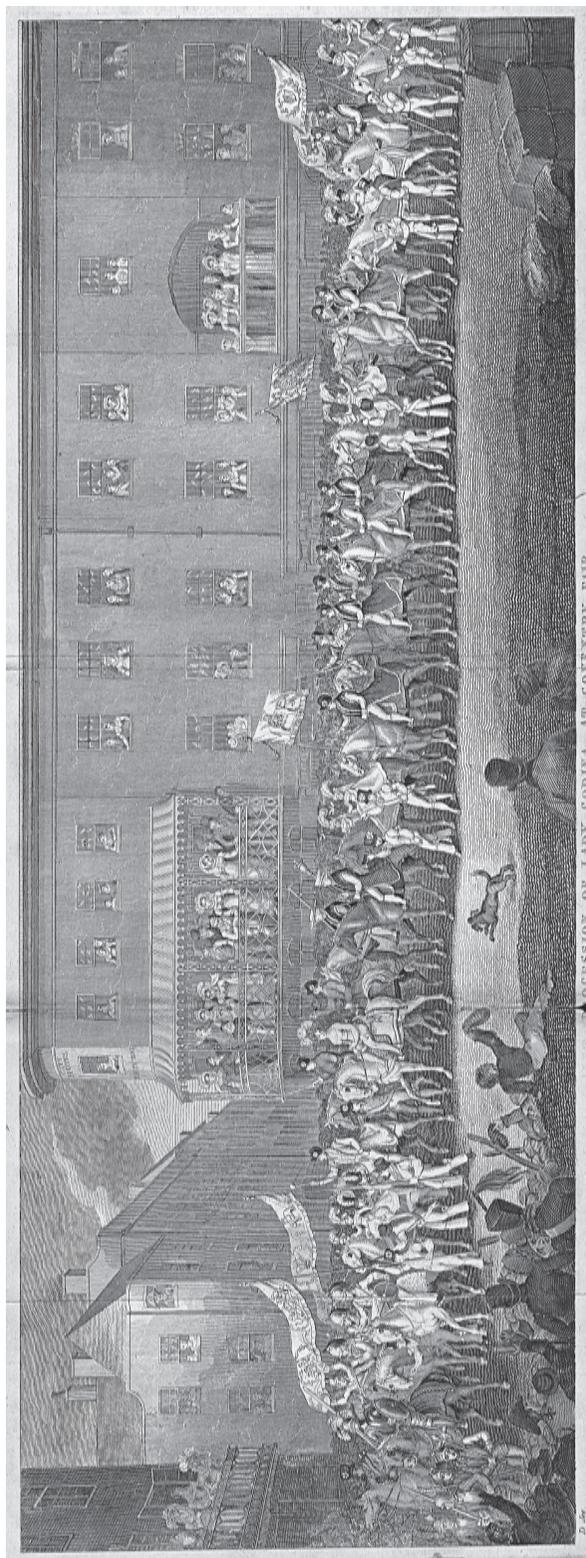
それぞれの制服を着た梳毛工 (Woolcombers)

楽隊

市当局が主催しておこなわれた行進とはいえ、異例の盛大さである。楽隊や鼓笛隊の人数が不明であるが、およそ300名前後の参加者であったとみられる。図1はこの様子を伝える銅版画と思われるが、プールが1852年に出版した『コヴェントリの歴史 (The History of Coventry)』の14頁と15頁の間に挿入されている⁽⁶⁾。錚錚たる騎馬行進である。中央やや左寄りに描かれているのがゴディヴァであろう。白馬に裸体と思われる姿で横座りし、頭には花飾りのついた帽子をかぶっている。ゴディヴァの行進は、1678年のフェアの目玉の出し物であったが、この出し物の評判はやがて近隣からイングランドの各地へと広まり、多くの人々がこのフェアの期間中にコヴェントリを訪れるようになった。その最盛期は18世紀から19世紀の初頭頃であったといわ

(5) 行列の最後になぜか、ギリシア神話に登場するイアソンが金羊毛を纏ってあらわれる。イアソンは、ギリシア北部イオルコスの王位継承者であったが、叔父に篡奪された王位を取り戻すべく、金羊毛をもとめてアルゴ船に乗り込み、黒海の東岸にあるコルキスへ向かい、コルキス王女メディアの助力を得て、見事に金羊毛をギリシアに持ち帰った冒険譚で知られている。アルゴ船にはヘラクレスをはじめ、名だたる英雄50人ほどが乗船していたという。詳しくは、ピーター・L・バーンスタイン著、鈴木主悦訳『金と人間の文明史』日本経済新聞社、2001年、20-3頁を参照。また、行進の最後に毛織物関係の人々が連なっていることは、この行進がコヴェントリで毛織物工業が栄えた、13~15世紀に起源をもつことを暗示しているように思われる。

(6) Pool, *The History of Coventry, being a Concise Account of the Ancient Institutions, Customs, & Public Buildings, of the City, and a Complete Epitome of Modern Changes; together with an Appendix, Including a Copious and Interesting Chronology of Local Occurrences*, Coventry, Printed and Published by D. Lewin, Hertford Street, 1852. この著書でプールは14頁から16頁にかけて、行進の序列を説明した後、16頁の注で次のような告知をしている。「上に記したような行進の繊細な銅版画(価格6ペンス)は、これを販売しているどこの本屋でも入手可能である。また、この出し物の由来と人物に関するより簡潔な案内書が、最近、ハートフォード通り(Hertford-street)のルイン氏(Mr. D. Lewin)によって出版された。価格は6ペンスである。」なお、プールの著書に挿入されている銅版画と、ここで販売が告知されている銅版画が同一のものであるかどうかはわからない。



Procession of Lady Godiva, at Coventry Fair

れている。この銅版画は、まさに最盛期の様子を伝えるものである。

II

この行進のもととなったコヴェントリの「貴婦人ゴディヴァ」の伝説については、すでに詳しく述べたが⁽⁷⁾、ここでその概略を再度繰り返しておくこととしよう。

ゴディヴァと聞くと、日本ではベルギーのショコラティエ会社 (Chocolatier) ゴディバ社を思いうかべる人が多いであろう⁽⁸⁾。聖バレンタインデーには、本命の彼氏にはゴディバのチョコレートとをプレゼントすると決めている女性も、少なからずいるのではないだろうか。それぐらいゴディバ社は、日本では高級チョコレートブランドとして定着している。それでは、ゴディバ社のロゴマークを思いだしていただきたい。その図像は髪の長い裸らしい女性が、馬にまたがっているように見える。ただし、そこまで注意深くロゴマークを見つめた人でさえ、このベルギーのチョコレート会社の名前が、中世のイングランドにそのルーツを持っていることを知っている人は、日本人ではごくわずかであろう。

実は、この社名のゴディバとは、11世紀のイングランドに実在した、かなり高い地位にあった婦人の名前である。彼女の夫であるレオフリックの実像を簡単に述べると以下のようなになる。イングランドは8世紀末頃よりヴァイキングの襲来に怯えるようになるが、ついに1016年、デンマーク王のクヌート (Cnut: イングランド王在位 1016-35) のもとにイングランド全土が制圧されてしまった。彼はその地をウェセックス (Wessex), イースト・アングリア (East Anglia), マーシア (Mercia), ノーザンブリア (Northumbria) の4つの地方に分け、信頼のおける臣下たちに与えた⁽⁹⁾。その際、彼は従来からの州太守 (ealdorman) にかえてアール (eorl) という新しい称号を与え、大きな権限を委譲したのであった⁽¹⁰⁾。1017年にクヌートはマーシアのアールとしてレオフリック (Leofric) を指名し、彼がその後1057年の死の年までマーシアのアールとして40年もの長期間君臨することとなる。そして、このレオフリックの妻がゴディヴァであった。レオフリックとゴディヴァは大変信心深い夫婦で、共同でコヴェントリに修道院を寄進したことで知られ、いわばコヴェントリのその後の発展の基礎を築いた人物だったわけである。

(7) 熊澤喜章「貴婦人ゴディヴァの伝説とコヴェントリ」『明大商学論叢』明大商学研究所, 第100巻第2号, 2018年。

(8) ゴディバ社の創始者ジョゼフ・ドラップス (Joseph Draps) と妻ガブリエル (Gabriel) は、コヴェントリにおける貴婦人ゴディヴァの伝説のなかに示された、彼女の勇気と深い愛に感銘し、1926年にベルギーに誕生したみずからのブランドに「ゴディバ」の名を冠したことが、ゴディバ社のホームページ上で紹介されている (<https://www.godiva.co.jp/about/episode.html> 2018年8月13日確認)。

(9) *The Anglo-Saxon Chronicle* (edited, with a Translation by B.Thorpe), Wiesbaden, 1964, p.124 (大沢一雄『アングロ・サクソン年代記』朝日出版社, 2012年, 175頁); *The Chronicle of John of Worcester* (edited by R.R.Darlington and P.McGurk, translated by J.Bray and P.McGurk), Oxford, 1995, pp.502-3.

(10) 青山吉信編『イギリス史I』山川出版社, 1991年, 179頁; ダニエル・ドナヒュー, 伊藤盡訳『貴婦人ゴディヴァー語り継がれる伝説』慶應義塾大学出版会, 2011年, 19頁。

さて、貴婦人ゴディヴァの伝説とは以下のようにきわめて単純な構成の物語である。信心深い伯爵夫人であるゴディヴァは、過酷で恥ずべき苦役からコヴェントリを解放したいと願い、しばしば自分の夫である伯爵レオフリックに対し、かの町をこの苦役から解き放つようにと請うたのであった。そして、伯爵が無益な強情を張って、自分の夫を破滅させることなど要求するな、と彼女を叱責した際には、夫人に向かって、この話題を彼に二度と持ち出すことのないようにと強く命じたのであるが、それにもかかわらず、夫人は女性特有のしつこさで自分の要求を繰り返し、夫を容赦なく責め立て、ついに夫から次のような答えを引き出した。

かれの答えは、裸のまま馬にまたがり、町に市が立ち、すべての住民が集まる場所を端から端まで進めば、彼女の要求を認めるというものであった。そして神に愛される伯爵夫人ゴディヴァは、定められた日に、二人の従者に付き添われて裸のまま自分の馬にまたがると、頭の髪を解いた。すると髪は彼女の全身を覆った。彼女の輝くような白い脚を除いて。そして、彼女が誰にも見られないままその旅程を終えたとき、彼女は喜びながら自分の夫のもとに戻り、かつての要求を夫に求めた。そして、レオフリック伯爵はコヴェントリの町をその苦役から解き放ち、特許状をもってその確認をしたというものである⁽¹¹⁾。

この物語は、13世紀のはじめ頃に書かれたセント・オールバンズ (St. Albans) の歴史家ロジャー・オヴ・ウェンドーヴァー (Roger of Wendover : 1237年没) の年代記 (Chronicle) のなかで紹介されている。この物語は年代記に登場する話としては、あまりにも突飛であり、また魅力的でもあったのであろう。このあと、各地で編纂されていた年代記に受け継がれるとともに、さまざまな要素がこの伝説に書き加えられていくことになったのである。

ところがゴディヴァの馬乗りの伝説には、もう一つのヴァージョンがある。それが16世紀の歴史家リチャード・グラフトン (Richard Grafton) によって1569年に書かれた年代記のなかの記述である。彼は1216年から1235年にかけてコヴェントリの修道院長であったジェフリー (Gaufride) の年代記を典拠にゴディヴァの馬乗りを語っている。それによると、ゴディヴァは馬乗りの実行前に町の公職にある有力者を集めて彼女の目的を話し、その後、彼ら有力者は町のすべての居住者に、家のなかにとどまり、窓をしめて通りを見ないようにとの命令を出したということである⁽¹²⁾。

グラフトンが典拠としているジェフリーの年代記はすでに失われており、現存していない。グラフトンがどこまで忠実にジェフリーの記述を書き写したのかはわからないし、グラフトンによる書き換えや書き加えがなされた可能性も残されている。

さて、この2つのヴァージョンで共通する項目は、ゴディヴァが神に愛される信仰心の篤い人物であったこと。彼女はコヴェントリに課された苦役・重税を免除するよう、夫であるレオフリ

(11) *Roger of Wendover's Flowers of History* (translated from the Latin by J.A.Giles) Vol. I, London, 1849, pp.314-5; *The Victoria History of the County of Warwick*, Vol.VIII, p.242; ドナヒュー、前掲書、48頁。

(12) R.Grafton, *Grafton's Chronicle: or, History of England*, London, 1809 (1st Published in 1569), pp147-8.

ックに懇請するが、彼は苦役・重税の免除と引き換えに、彼女に裸で馬に乗り、コヴェントリの町なかを通ることを要求すること。彼女は裸の馬乗りを実行し、コヴェントリの町を苦役・重税から解放し、民衆の賞賛をあつめたことであった。ゴディヴァの犠牲的行為によって、コヴェントリの町の自由が獲得されたわけである。ただし、ゴディヴァが実在していたころのコヴェントリは、おそらく人口300~350人程度の集落であり、住人はすべて隷農の身分に属していた⁽¹³⁾。都市もなければ市民もいないわけである。この集落に苦役・重税を課するという設定をすることは時代錯誤的であり、この物語が後世に書かれたことを示唆している。

異なっている部分は、裸の馬乗りを実行する際の状況である。ウエンドーヴァーのバージョンでは、ゴディヴァの長い髪が、白い脚を除いて彼女の裸体を民衆の目から守ったことになっている。これに対して、グラフトンのバージョンでは、ゴディヴァは馬乗りの実行前に町の公職にある有力者を集めて彼女の目的を話し、その後、彼ら有力者は町のすべての居住者に、家のなかにとどまり、窓をしめて通りを見ないようにとの命令を出したということである。したがって、彼女はみずからの裸体を隠す必要はなかったのであり、彼女の髪に関する記述はない。

いずれにせよ、ゴディヴァはコヴェントリの町を苦役・重税から解放した、自由のシンボルとして描かれている。フェアの開催が自治都市にのみ認められた特権であるとするなら、そのフェアを盛り上げるための目玉の出し物として、ゴディヴァの行進が選ばれたことは当然のなりゆきであっただろう。伝説上の人物が、現実のショウのなかで演じられることになったのである。これが評判となり、イングランド中から多くの観客がコヴェントリを訪れ、地域の諸産業に恩恵を与えたのであった。

III

ところで、ゴディヴァの行進には、もう一人の重要な登場人物がいる。すなわち「^{ピーピング・トム}のぞき屋トム (Peeping Tom)」である。グラフトンによって、町の有力者がゴディヴァの馬乗りの日のその時刻に、住民に対して家のなかにとどまり、外を見ることのないようにという布告を出させたという表現が伝説に書き加えられた瞬間、そこにこの布告を破り、ひとり窓の隙間から、ないしはみずから錐で穴をあけて、ゴディヴァの裸体を覗き見しようとするふとどき者、「^{ピーピング・トム}のぞき屋トム」の出現が運命づけられたといってもいいであろう。英語で“peep”とは「覗き見をする」という意味であるが、このゴディヴァの伝説によって、覗き見をする男の代名詞として、“Peeping Tom”という言葉が使われだし、しかも仕立屋という職業まで拝領してしまったのである。哀れなことに、この覗き見をしたことに対する天罰は、両眼を潰される、ないしは命をおとすという過酷なものであった。

(13) *The Victoria History of the County of Warwick*, Vol.I, London, 1965, p.310; M.D.Harris, *Life in an Old English Town: A History of Coventry from the Earliest Times Compiled from Official Records*, London, 1898, p.31; M.D.Harris, *The Story of Coventry*, London, 1911, p.37.

当初はゴディヴァの行進のなかに、この「^{ピーピング・トム}のぞき屋トム」も含まれていたようであるが、1826年の行進序列のなかに「^{ピーピング・トム}のぞき屋トム」は含まれていない。彼は一種のスケープゴートであり、彼が天罰を受けたことにより、観衆は安心してゴディヴァの裸の馬乗りの行進を見ることができるのである。図1にも「^{ピーピング・トム}のぞき屋トム」が描かれている。左から2棟目の建物の角の上方、すなわち左側の紋章旗が括り付けられているポールの上方に小窓があり、そこに三角帽子（ナポレオンがよく被っていた帽子）を被った男が描かれている。彼こそ「^{ピーピング・トム}のぞき屋トム」なのである。18世紀の初頭にコヴェントリを訪れたダニエル・デフォー（Daniel Defoe）もゴディヴァの伝説をすでに知っており、「彼女を見ようと、町のハイ・ストリート（High Street）にある屋根裏部屋の窓から外をのぞこうとした哀れな人物の像」に言及している⁽¹⁴⁾。

1678年のグレート・ショー・フェアの際に、「^{ピーピング・トム}のぞき屋トム」がいたかどうかは確認がない。しかし、この大祭の前に、裸体のゴディヴァと「^{ピーピング・トム}のぞき屋トム」がセットで描かれていた証拠がある。大英博物館所蔵のランズダウン文書（Lansdowne MSS.）には、1634年8月にミッドランド地方を旅したノリッジの軍事組織の大佐・大尉・退役軍人の一行の記述が残されている。彼らはコヴェントリの聖メアリー・ホール（St. Mary's Hall）に飾られた見事な壁飾りの貴婦人（a noble lady : Lady Godiva）の姿に言及し、彼女の勇氣ある行動によってコヴェントリの町の自由が獲得された経緯を忘れられない思い出として述べ、その際、彼女の夫の敵意がどれほどのものであったのか、あるいはそれ以上に彼女の愛情がまさったのか、おおいに議論したという。また、彼女の美しく長い髪が、「覗き見の視線（“the wanton's glancing eye”）」から彼女を守ったとも述べている。この“the wanton's glancing eye”という表現が、「^{ピーピング・トム}のぞき屋トム」を示唆しているととらえるには、あまりにも曖昧な表現である。しかし、長らく埃にまみれていたこの絵が1976年に洗浄された際、建物を背景にゴディヴァの馬乗りの姿のみが描かれているとおもわれていた画面の右上の窓に、顎鬚を生やしたひとりの男が描かれていることがわかった。この人物を夫のレオフリックとみるか「^{ピーピング・トム}のぞき屋トム」とみるかは意見のわかれるところであるが、ともかく覗き見をする人物が描かれていたことは事実である⁽¹⁵⁾。

こうした事実からハートランド（E.S.Hartland）は、ゴディヴァの行進はおそらく、コヴェントリでフェアの開催がヘンリ3世によって許可された1217年頃からおこなわれており、「^{ピーピング・トム}のぞき屋トム」の登場はチャールズ2世の頃からはではないかと推察している⁽¹⁶⁾。また、彼はこうした行進がはるかな過去の異教の風習、すなわち豊穡の女神を崇高する行為から派生したのではないかとも指摘している⁽¹⁷⁾。

コヴェントリには、「^{ピーピング・トム}のぞき屋トム」と思われる樅の木の彫像が残されている。この像は鎧を

(14) Daniel Defoe, *A Tour through the Whole Island of Great Britain*, First Published 1724-6, published in Penguin English Library, Harmondsworth, 1971, p.404.

(15) E.S.Hartland, 'Peeping Tom and Lady Godiva', *Folklore*, Vol.1, No.2, 1890, p.217; do., *The Science of Fairy Tales*, p.74; ドナヒュー, 前掲書, 128頁.

(16) Hartland, 'Peeping Tom and Lady Godiva', pp.217-8; do., *The Science of Fairy Tales*, pp.74-5.

(17) Hartland, 'Peeping Tom and Lady Godiva', p.225.



図2 ゴディヴァの像 (筆者撮影)



図3 ゴディヴァの像 (筆者撮影)

着た彫像で、悪名高い仕立屋 (the notorious tailor) と呼ばれて、行進の際にスミスフォード通り (Smithford Street) の角にあるキングズヘッド (King's Head) という宿屋の上階の窓から顔を覗かせていた。製作年代はヘンリ7世の治世 (1485-1509) 以前にさかのぼることはないと思われ、窓からの出し入れがしやすいように両腕がひじのところで切り取られている⁽¹⁸⁾。ハートランドは、この像が、もともとイングランドの守護聖人である聖ジョージ (St. George) の像だったのではないかとする見解を紹介し、もともとのデザインが忘れられ、その衣装の不釣り合いさが意識されなくなってから、このような使われかたになったのではないかと述べている⁽¹⁹⁾。また、1678年のフェアの際に、グレイ・フライヤーズ通り (Gray Friars Lane) で参事会員のオーウェン (Owen) によって掲げられた像 (a figure) がこの像であったらうとしている⁽²⁰⁾。もし、この像がもともとは聖ジョージの彫像であったとするなら、1826年の行進の先頭の一団にいる、鎧をつけた聖ジョージとは「のぞき屋トム」^{ピーピング・トム}の暗示なのであろうか。詳しいことはわからないが、奇妙な符合がみられる。

現在のコヴェントリ市は、かつての中世の城壁はすべて取り除かれ、それよりひとまわり大きな環状道路が町の中心部を囲んでいる。町の中心部のほぼ中央、ブロードゲート (Broadgate) にゴディヴァの像が設置されており、そこにつながるハートフォード通り (Hertford Street)

(18) Hartland, 'Peeping Tom and Lady Godiva', p.218; do., *The Science of Fairy Tales*, p.76. ドナヒューの著書にはこの像の写真が掲載されており、彼はこの像を1500年頃の作と紹介している (ドナヒュー, 前掲書, 130-1頁)。

(19) Hartland, *The Science of Fairy Tales*, p.76.

(20) ハートランドは、この情報を考古学学会員のサミュエル・ティミンズ (Samuel Timmins) 氏と同じく学会員のジョージ・フレットン (George Fretton) 氏に負っていると、わざわざ注で述べている (Hartland, 'Peeping Tom and Lady Godiva', p.218)。



図4 「のぞき屋トム」の像（筆者撮影）



図5 「のぞき屋トム」の像（筆者撮影）

の商店街のアーケードのなかに、「のぞき屋トム」の像が設置されている。図2・3はゴディヴァの像、図4・5は「のぞき屋トム」の像である。

ゴディヴァの像は1949年にウィリアム・レイド・ディック卿（Sir William Reid Dick）によって制作されたもので⁽²¹⁾、バセット＝グリーン（W. H. Bassett-Green）氏によって過去の町への貢献者に捧げられるとともに、コヴェントリ市民へと寄贈された。「のぞき屋トム」の像のほうは、近くで確かめたわけではないが、作り方も設置の仕方にもあまりにもぞんざいである。伝説の詳細を知らないと、通り過ぎてしまいそうである。通りを行きかう人々も、これらの像に特段の興味も持たない。貴婦人ゴディヴァの伝説とは、今ではチョコレート会社に名前を残すのみで、現在の人々にとっては、すでに忘れ去られた過去の遺物となってしまったかのようである。

IV

1678年5月31日のグレート・ショウ・フェアの目玉の出し物のひとつとして、ゴディヴァの行進が選ばれた理由は、あきらかにその商業的価値にある。町に伝わる伝説を巧みに利用した集客の企画であったといえよう。ところで、美談として描かれた伝説に人々がひきつけられたのは、ゴディヴァの信仰心の篤さ、住民への愛、正義のために不可能と思われたことを実行した勇気のためだけであっただろうか。たとえば、町の基礎をつくったレオフリックとゴディヴァが、町の重職たちに囲まれて豪華な衣装を着て通りを行進したとするなら、遠くロンドンからもそれを見たいという観客は押し寄せたのだろうか。断言しよう、「そうではない」。「のぞき屋トム」がゴ

(21) *The Victoria History of the County of Warwick*, Vol.VIII, p.243

ディヴァの裸体を覗き見たいという願望を持ったように、ゴディヴァの行進を見つめる人々の目にも、同様の願望があらわれている。「のぞき屋トム」^{ビーピング・トム}はひとり隠れてゴディヴァの裸体を窃視したのに対し、ゴディヴァの行進を見る多くの観衆は、何の罪悪感も覚えずにゴディヴァの裸体を堂々と鑑賞する。だから「のぞき屋トム」^{ビーピング・トム}はスケープゴート、すなわち彼が一身に罰を受けて失明ないしは落命した結果、他の観客はその罰を逃れられるという犠牲の象徴なのである。彼ひとりが犠牲になることによって、多くの観衆は安心してゴディヴァの行進を見ることができるようである。

1678年の最初の公式の行進では、ゴディヴァ役をジェームス・スウィナートンの息子、すなわち少年が演じていたが、その後は近隣の村落の娘や女優等が雇われた。そして時代が許す範囲の裸に見える衣装、すなわち身体にぴったりとした肌色の衣装を纏って白馬に乗ったのである。時代が移り19世紀になると、観客の興味はゴディヴァの伝説そのものではなく、もっぱらゴディヴァを演じる村娘あるいは女優に移行するのは必然の結果であった。今年は誰が乗るのか、今年には本当に裸で乗るのか、といった話題が巷に溢れるようになったのである。市当局が1835年の地方自治体法の成立以降主催を降り、市長以下町の重職が行進への参加を取りやめたのも、こうした状況に真面目な市民から苦情が生じてきたことも関連していると思われる。

行進が市当局の主催から離れるとともに、このフェアを商業的に有効利用しようとする動きも活性化した。1836年に売り出されたお土産品の数々が記録されている。貴婦人ゴディヴァの帽子、貴婦人ゴディヴァの歴史的帽子、貴婦人ゴディヴァの婦人用鞍・カヴァー・3本の腹帯のセット、3本の市の旗、4組の紋章旗、先端が金色の2組の紋章旗、行進で使われた14本の紋章旗、2本の指揮棒、6本の剣、銀糸で刺繍された6枚の鞍飾り、行進で着用した10着の古いヴェスト、2人の随員のドレス、6本の古いベルト、2つの市の随員の帽子などである⁽²²⁾。これらのお土産品は7月に売り出されており、おそらくフェアが終わった後に主催団体によって記念品として売り出されたものであろうと思われる。

こうした記念品のほかに、フェアを訪れた多くの観客むけに数々のお土産品が売り出され、コヴェントリの町に膨大な利益がもたらされた。そうしたお土産品のなかで、フェアの様子を実際に伝えるものとして小型の写真があった。これはまだ高価であった写真の価格を引き下げするために、クレジットカードほどのサイズにした小さな写真で、1860年代頃から販売されたものであった。ゴディヴァの行進は、年とともに開催回数が次第に減少し、1862年から第二次大戦までの間に15回ほどしか開催されなくなり、第二次世界大戦後に、映画のような他の娯楽が普及してからはそれ程の集客効果をもたらさなかった。とはいうものの、1936年に開催された行進では20万人（他の推計では30万人）の人々がコヴェントリの町の道路を埋めつくしたという⁽²³⁾。

1870年から1936年にかけての、こうしたお土産用の写真やコヴェントリで撮影された写真と

(22) Pool, *Coventry: Its History and Antiquities*, p.67.

(23) A. Smith and D. Fry, *Godiva's Heritage: Coventry's Industry*, Berkswell, 1997, p.5.

ともに、若干の報道関係の記事が残されている。それらをもとに、当時、ゴディヴァの行進が社会的にどうとらえられていたのかを探ってみよう。

1870年はミス・ローズ・ウィリアムス (Miss Rose Williams), 1877年はミス・エガートン (Miss Edgerton), 1883年はモード・フォレスター (Maude Forester) がゴディヴァ役を演じた。この頃のコスチュームはきちんとした衣装, すなわちブラウスとスカートを着用しており, 裸を演出するものではない。ただ, 1883年のフォレスターは素足に見えるようなストッキングである “fleshings”, つまり “flesh-coloured tights” をはいていたため, それに関して辛辣な意見が表明された。ただし, 写真でみると膝丈のブーツを履いており, 脚はほとんど露出してはいない。バーミンガムや近隣の村落から多くの観客が鉄道を使ってコヴェントリへとやってきた。観客の評判は3回とも上々であるが, 新聞の記事は辛口のコメントが繰り返された。1877年のデイリー・エクスプレス (Daily Express) は, 「ゴディヴァは最初の時と同じように貧しい町の商人たちを救ったのである」と皮肉たっぷりに賞賛し, 続けて, 「彼女は本当は自転車に乗るべきだったのかもしれない。というも, この産業が衰退するリボン工業にかわって町を救ったのであるから」と伝えた。また, 1883年のタイムズ紙 (The Times) は読者の声として「とてつもなく俗悪な道化」と書き, 同年のコヴェントリ・ヘラルド紙 (The Coventry Herald) は「荘厳な儀式というより娯楽劇のようにみえた」と伝えている⁽²⁴⁾。また, 1848年以来恒例となっている像が行進に加わっている映像が残されているが, これは市の紋章が図6にみられるように, 像の背中に3本の塔がある城がのり, その上にライオンが配置されたものだからである。

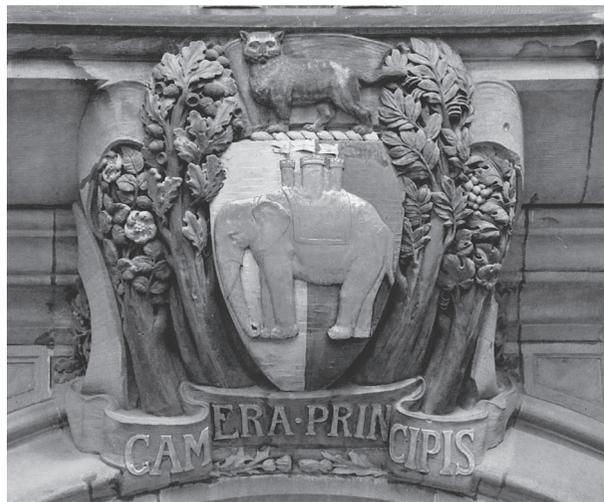


図6 コヴェントリ市の紋章 (筆者撮影)

1907年の行進は, 1902年のエドワード7世の戴冠式を祝う行進に次いで, 20世紀2度目の行

(24) Smith and Fry, *op. cit.*, pp.6-7.

進となった。コヴェントリのこの催しは、劇場のような限られた空間で演じられるものではなく、無料で多くの観衆に提供されており、ゴディヴァ役を演じる女性には国民的関心が集められた。また、ゴディヴァの衣装に関しても、1883年と同様、多くの聖職者や大臣から辛辣な意見が示された。この年のゴディヴァ役、ラ・ミロ (La Milo) あるいは別名ミス・パンシー・モンターギュ (Miss Pancy Montague) は、馬乗りの前夜に彼女の立場を擁護するため、長文の意見書を発表した。彼女は自身に対する批判に対して「狭量で偏屈で誤解している」と述べ、彼らの見解は「常識がなく、行進のあり方を故意に歪曲している」とした。また、彼らの行動は「重大なチャリティーの目的のために多額の寄付金を集めようとする計画を危うくしている」と続けた。チャリティーの目的は、コヴェントリ病院 (the Coventry Hospital) のために目標1,000ポンドを集めようとするものであった。ラ・ミロは多くの候補者のなかから選ばれ、チャリティーの目的のため、出演料の受け取りを辞退した。彼女はまさしく「生ける彫像 (living statuary)」の先駆であり、イギリス舞台史上「最も完璧な女性の姿 (the most perfect of Feminine figures)」であったと絶賛を浴びた⁽²⁵⁾。

この頃になると、お土産用の写真ばかりでなく、一般の人々が撮影した多くの写真が残されている。写真から見ると、鏡に掛けられた彼女の脚はストッキングを履いているのだろうが素足のよう見え、靴は履いていないが、膝下まで薄いヴェールで覆われている。髪は異常に長く、彼女の上半身から馬の腹までも覆っている。このため、ウエンドーヴァーの描写のように、彼女の白い脚を除いて、身体すべてが髪で覆われた状態となっている。行進には像も登場し、楽隊は当時としては珍しい自動車の荷台のような部分に座っている。町の中心部であるブロードゲートは、まさに黒山の人だかりといった有様である。推定15万人の人々が町の通りに溢れ、鉄道は25,000人の訪問客を運んだ。また、アメリカからも多くの観客が詰めかけたという⁽²⁶⁾。

1911年の行進はジョージ5世の即位を祝っておこなわれ、ゴディヴァ役にはロンドンの女優ミス・ヴァイオラ・ハミルトン (Miss Viola Hamilton) が選ばれ、地方紙はかつておこなわれたページェント ('gone on' pageantry) のようだとして評した。30年後、彼女は1949年にブロードゲートに設置されたゴディヴァの彫像のモデルとなるため、ロンドンのウィリアム・レイド・ディックのスタジオを訪れることとなる⁽²⁷⁾。

1919年の行進はいささか残念な結果となってしまった。ちょうど3週間前に第一次大戦の和平条約がヴェルサイユで調印され、7月までに多くの兵士が復員してきたが、町の状況はかつてのような騒がしいお祭り気分というよりも、静謐な雰囲気であらわされていた。そのようななかで、行進後の数夜にわたって暴動 (Peace Riots) が起こり、町の中心部が破壊されてしまったのである⁽²⁸⁾。ゴディヴァ役はめずらしくコヴェントリの女性で、市議会議員の娘ミス・グラディ

(25) Smith and Fry, *op. cit.*, p.8.

(26) Smith and Fry, *op. cit.*, pp.8-14.

(27) Smith and Fry, *op. cit.*, pp.16-21.

(28) P. Walters, *The Story of Coventry*, Stroud, 2013, p.211; D.McGrory, *Bloody British History, Coventry*, Chichester, 2013, pp.94-6.

ス・マン (Miss Gladys Mann) であった。写真でみると、通常ゴディヴァ役と違って、裸を連想させる衣装ではなく、完全にサクソン風のドレスを着用している⁽²⁹⁾。

1929年のゴディヴァ役はミス・ムリエル・メロウプ (Miss Muriel Mellerup)、1936年は第二次大戦前の最後の盛大な行進で、ゴディヴァ役はミス・フランセス・バーチェル (Miss Frances P. Burchell) であった。衣装はストッキングを履いて足だけを見せるコスチュームに戻っている。1929年には珍しい写真として、コヴェントリ・アンド・ウォリックシャー病院 (the Coventry and Warwickshire Hospital) の入院患者が行進を見るためにバード街 (Bird Street) に160床のベッドを持ちだした様子が残されている。また、1936年の夜のハイライトは午後11時に打ち上げられた花火で、約50,000人の人々が夜空で繰り広げられる饗宴を楽しんだのであった⁽³⁰⁾。

以上のように、ゴディヴァの行進は、さまざまな批判を浴びつつも、人々がある種の娯楽として楽しみ、コヴェントリの町に多大な収入や寄付金をもたらしたのであった。批判が多いということは、それだけ注目されているということであり、ゴディヴァそのものに対して国民的関心があったことの証でもある。しかし、さすがに第二次大戦後となると観客の興味もうすれ、ゴディヴァの伝説自体も人々の記憶から消え去りはじめ、行進がおこなわれることは極端に少なくなっていた。やがて大多数の人々がゴディヴァと結びつけて連想するのはチョコレート会社となり、コヴェントリではなくなったのである。イギリスでさえこのような状態なのであるから、日本においてはなおさらのことであろう。最後に、ゴディヴァの行進がコヴェントリにとって、どのような意味を持っていたのか、そのルーツを確かめることとしよう。

V

1264年、時の教皇ウルバヌス (Urbanus) 4世は、キリストの最後の晩餐とキリストの定めた聖餐式とを祝う祭日を新たに設けたいとの意向を表明した。聖餐式とは、最後の晩餐でキリストが弟子たちにパンと葡萄酒を分け与え、これが私の肉と血であるとしたことから、ミサにおいてキリストの肉と血の実体的変化、すなわち「化体」として、聖別されたパンを食し、葡萄酒を飲む儀式である。新しい祭日である聖体祭 (Corpus Christi) は、その後クレメンス (Clemens) 5世のもとで、1311年の公会議において制定が裁可された。祝祭日は三位一体の日曜後の木曜日、つまり精霊降臨祭の11日後と定められた。当時の暦では、5月20日から6月24日の間を動く祭日で、ちょうどヨーロッパでは昼間の時間が最も長い夏至の日近辺に開催され、日中の行事を執り行うには格好の日程であった。

ローマ教皇の大勅書は、祭日を必ず聖体を崇める行列でもって祝うよう定めていたが、その他の細かい行事は土地ごとの共同体のやり方にまかされた。当初は教会関係者や宗教団体が地域の

(29) Smith and Fry, *op. cit.*, pp.22-3.

(30) Smith and Fry, *op. cit.*, pp.24-8.

主なる教会から聖体を運び出し、それを掲げて市中を練り歩いていたが、やがてこの行列、すなわち行進を組織するためにコーパス・クリスティ・ギルドが設立された⁽³¹⁾。聖体祭は1318年にイングランドに紹介され、イングランド各地にひろまっていったが、コヴェントリにコーパス・クリスティ・ギルドが設立される1348年頃には、コヴェントリでもすでに町全体を巻き込む行事となっていた⁽³²⁾。

聖体祭当日の朝、聖体祭の行進ははじまる。商工業者の組合の山車 (train) に先導されて、聖餐式のパン (the Host) を掲げたトリニティー・ギルド (the Trinity guild) のメンバーたち、あるいは司祭たちが登場し、この聖体 (the Sacrament) のあとに各種の町の宗教団体が、おそらく徒歩で続いた。コーパス・クリスティ・ギルドは豪華なうつわを用意し、その中に聖別されたパンが納められている。それを覆うために高価な装飾を施した天蓋が、ギルドのメンバーによって雇われた4人の市民によって支えられた。また、宗教的儀式の効果は、ギルドの宝物保管庫からだされた紋章旗や十字架によってたかめられたのであった⁽³³⁾。

実は、コヴェントリにおいては、この行進の後にもう一つの催しが準備されていた。それが、聖体祭の日に上演される祝祭劇であった。それは、旧約聖書・新約聖書の題材をもとに演じられた民衆演劇で、ミステリー劇 (mystery play) あるいはサイクル劇 (cycle play) と呼ばれていた。ミステリー劇は、よく「神秘劇」あるいは「奇跡劇」と訳されてきたが、ミステリー劇の“mystery”はラテン語の“ministrum”に語源をもつフランス語の“mystère”に由来する言葉で、“craft”あるいは“trade”，すなわち職業を意味する言葉であった⁽³⁴⁾。劇の上演に際しては、コヴェントリの多くのクラフト・ギルドがかかわっており、舞台装置の作成や実際の出演者まで、多大な出費と労力を彼らが負担したのであった。また、サイクル劇と呼ばれた所以は、各劇が短い劇で作成されて、それらを集大成すると遠大な聖書の物語となっているためで、たとえばヨーク・サイクルは50近い劇で構成されていたし、コヴェントリ・サイクルは10演目で構成されていた。

現存するコヴェントリ・サイクルの劇は、受胎告知、キリスト降誕、3博士の礼拝、幼児大虐殺をカバーするやや長めの「裁断師と仕立屋の劇」と、聖母マリアの浄め、少年イエスの神殿内での議論をカバーする「織布工組合の劇」の2つのみとなっている。コヴェントリ劇は、当時大変な人気を博したため、多くの王族がこの劇を見るためにコヴェントリを訪れている。王族が訪問した際には、聖体祭の祝日以外に特別に劇が上演され、彼らから多大な愛顧を得たのであった⁽³⁵⁾。

(31) 石井美樹子『イギリス中世劇集—コーパス・クリスティ祝祭劇—』篠崎書林、1983年、7頁；同『中世劇の世界 よみがえるイギリス民衆文化』中公新書、1984年、20-1頁。

(32) ドナヒュー、前掲書、90頁。

(33) Harris, *Life in an Old English Town*, p.340; do, *The Story of Coventry*, p.287.

(34) 石井美樹子『イギリス中世劇集』、5頁；同『中世劇の世界』、18-9頁。

(35) H. Craig, *Two Coventry Corpus Christi Plays*, London, 1902, pp.xx-xxii; 石井美樹子『中世劇の世界』、36頁。

さて、話を聖体祭の行進に戻そう。コヴェントリの商工業者が山車に乗って行進の先導役を務めたことは、この祝祭が町の聖俗のお偉方のみによって主催されたのではなく、町の間層である商工業者をも巻き込む町全体としての催しであったことを示している。町の下層を構成する職人や労働者も、サイクル劇の終了後には親方の家でのご馳走にありついたのであった。中世においては仲間内で会合を開き、その後大量の飲み食いがおこなわれ、親睦を深めることがしばしばおこなわれていた。こうしたことから、このお祭りのひとつの目的が、町の統一、秩序を安寧に保ち、市民同士の諍いを回避することにもあったと思われる⁽³⁶⁾。さらに、先導役の商工業者が山車に乗っていることは、その後のサイクル劇が移動舞台、すなわち山車に乗せられた舞台上で、町の特定の場所にとまってつぎつぎと上演されたことをも意味している。彼らは、行進の後で催されるサイクル劇のお触れでもあるわけである。

行進がおこなわれている間に劇の準備がすすめられたが、それに出演する役者たちも行進に参加した。コーパス・クリスティ・ギルドには、ゆりの花を持つ大天使ガブリエル、高価な銀の冠を頭にのせた聖母、12使徒、8人の処女、聖マーガレット、聖キャサリンを演じた人々に支払がなされた記録が残っているし、鍛冶工組合は、後の舞台でヘロデ (Herod) 役を演ずる役者が、行進で馬に乗る際の豪華に装飾された外套の費用を負担したのであった⁽³⁷⁾。こうして、聖体祭の行進は町全体を巻き込む一大ページェントとして実行されたのである。

さて、ここで聖体祭の行進の「聖別されたパン」を、「ゴディヴァの裸体」と置き換えたら、どのようなことがおこるであろうか。論文の冒頭で紹介した1826年の行進の序列を眺めると、イングランドの守護聖人聖ジョージに先導されて、ゴディヴァが続き、その後を町の重鎮たち、諸組合、諸慈善団体、そしてギリシア神話の登場人物までが行進に参加する。一方では聖別されたパンがキリストの肉体の化体として顕示され、他方では実在の人物でありながら、町に自由をもたらしたという伝説に祀り上げられた裸体の女性のなり替わりが、馬上にその姿をあらわす。これをカトリックを揶揄するパロディーとみるか、庶民のユーモアと逞しい商魂のあらわれとみるかは、人それぞれであろう。しかし、ゴディヴァの行進が、そのルーツをキリスト聖体祭の行進にもっていることは紛れもない事実である。また、こうした行進自体がキリスト教が布教される前の異教の風習によるものであると、ハートランドのように解釈することも可能であろう。ともあれ、遠く13世紀にはじまったであろう民衆のお祭りの行進は、14世紀初頭のキリスト聖体祭の行進へと引き継がれ、コヴェントリの人々の記憶のなかに生き続けた。17世紀後半のコヴェントリの人々は、その記憶をゴディヴァの行進としてみごとに蘇らせたのである。

キリスト聖体祭の行進は、ヘンリ8世の宗教改革と修道院解散の後に姿を消し、1392年にはじまったコヴェントリのサイクル劇も、1580年、食肉業者のトーマス・サンダース (Thomas

(36) Harris, *Life in an Old English Town*, pp.335-6; do, *The Story of Coventry*, pp.283-4.

(37) T. Sharp, *A Dissertation on the Pageants or Dramatic Mysteries Anciently Performed at Coventry* (1st published in Coventry, 1825), with a New Foreword by A. C. Cawley, Wakefield, 1973, pp.161-4.

Saunders) が市長の時に廃止となった⁽³⁸⁾。では、およそ1540年頃から1678年まで、キリスト聖体祭の行進をまねたような行進は、まったくおこなわれなかったのであろうか。ドナヒュー(D. Donoghue) はゴディヴァの行進があきらかにカトリックの sacrament を揶揄するパロディーであることを強調し、コヴェントリ市民によって、ある種の悪ふざけとして行進がおこなわれた証拠を示し、それがピューリタン革命のはじまる1642年と王政復古の1660年の間におこなわれた可能性が高いことを示唆している。その理由は、エリザベス1世とジェームス1世の時代のイギリス国教会が、いまだ聖餐の中心であり、典礼の一部であった聖体をからかう民衆を放置することはないし、ましてや、チャールズ2世の王政復古以降におこなわれたと想像することはもっと難しいからというものであった⁽³⁹⁾。

もしそうだとするならば、反カトリック感情が激しかった1642年から1660年の間に、民衆の間で密におこなわれたであろうゴディヴァの行進が、今度は1678年、チャールズ2世治下のコヴェントリで、なぜ町主催のもとで堂々とおこなわれたのであろうか。フェアの目玉とした催しであるからには、近隣に盛大な宣伝がおこなわれたであろうことは容易に想像できる。しかも、1678年以降は、毎年のようにこの催しがフェアの目玉の出し物として定着したのである。ジェームズ2世の王位剥奪よりも10年も前である。カトリックの sacrament を揶揄したというよりも、コヴェントリの人々の商魂が優ったということであろうか。

というのも、16世紀初頭から17世紀初頭にかけて、コヴェントリは重大な危機の局面にあったことを忘れてはならない。イングランドの中世都市として、13世紀から15世紀にかけて順調に成長してきたコヴェントリが突然の危機にみまわれたのである。危機の内容は疫病の流行や食糧危機による人口減少、ギルドの衰退、商工業の停滞等、多くの局面でみられたのであった。しかもその危機からの脱却は17世紀になってからで、その回復も緩慢なものであった⁽⁴⁰⁾。そうした停滞した都市活動のなかでも、コヴェントリにようやく回復への兆しがみえはじめてくるのが、17世紀も終わり近くになってからであった。コヴェントリに新たな産業の息吹がみえはじめたのである。それが時計工業とフランスからのユグノーと呼ばれる新教徒がコヴェントリにもたらした絹糸によるリボン工業であった。

1678年という時期を考慮にいれるならば、コヴェントリはようやく新たな産業発展の糸口を

(38) Sharp, *Dissertation on the Pageants or Dramatic Mysteries*, p.39; R. W. Ingram (ed.), *Records of Early English Drama: Coventry*, Manchester, 1981, p.294.

(39) ドナヒュー, 前掲書, 88頁。

(40) クラーク・スラック著, 酒田利夫訳『変貌するイングランド都市』三嶺書房, 1989年, 126頁。クラークとスラックは、こうした状況はコヴェントリに限らず、イングランドにおいては16世紀半ばには都市衰退が広範にみられ、都市生活の諸側面のほとんどがそれに影響され、この衰退からの回復は緩慢かつ決して確実なものではなかったと述べている(クラーク・スラック, 前掲書, 21頁)。クラークとスラックの原著 *English Towns in Transition* は1976年に出版されているが、その後、コヴェントリに関しては、この時期の衰退の詳細な研究が発表されている。詳しくは、C. Phythian-Adams, *Desolation of a City: Coventry and the Urban Crisis of the Late Middle Ages*, Cambridge, 1979を参照。また、熊澤喜章「コヴェントリ小史」『明大商学論叢』明治大学商学研究所, 第100巻第1号, 58-60頁も参照。

みつけ、それを祝うために町の発展の端緒となったゴディヴァを讃える行進を企画したのではないだろうか。そうした町の総意は、反カトリック感情やカトリックの sacrament を揶揄する意識を、大きく上回るものであった。だからこそ、イギリス中の人々がこの盛大なお祭りを、多分に好奇の目を持ちつつも受け入れたのであろう。その効果は、ゴディヴァの伝説をイングランド中に広める契機ともなったと考えられる。そしてお祭りを成功させるためには、その地域の人々の多大な労力や金銭的負担が求められた。町の総力をあげて、町の成り立ち、そのアイデンティティーを世間にアピールしたのである。お祭りとは、何処においても、いつの時代にあっても、およそそのようなものなのであろう。識者は眉をしかめ、ある種の人々は低俗な悪ふざけととらえるかもしれないが、そこには地域の統一と融和を促進し、諍いをおさめ、貴賤・貧富の差をのり超えて、町のために協力する一貫した姿勢がしめされている。そこにみられるのは、ユーモアに溢れた民衆のしたたかさと逞しさなのである。